ISSN 2435-368X（オンライン）

第43回 近畿作業療法学会

the 43rd Kinki Occupational Therapy Congress

テーマ

作業療法のこれから
～臨床と研究の実践力を高める～

2023年6月4日（日）
特別講演、教育講演をLIVE配信
（Zoomウェビナー）

2023年
6月8日（木）～6月30日（金）
オンデマンド配信

会 場　オンライン

学会長　西井 正樹
（一般社団法人 奈良県作業療法士会 会長）

主 催　近畿作業療法士連絡協議会

担 当　一般社団法人 奈良県作業療法士会

第43回
近畿作業療法学会

The 43rd Kinki Occupational Therapy Congress

テーマ

作業療法のこれから
～臨床と研究の実践力を高める～

会　期 ● 2023年 6月4日(日)
特別講演、教育講演をLIVE配信（Zoomウェビナー）

2023年 6月8日(木)～ 6月30日(金)
オンデマンド配信

会　場 ● オンライン

学会長 ● 西井　正樹　一般社団法人 奈良県作業療法士会　会長

主　催 ● 近畿作業療法士連絡協議会

担　当 ● 一般社団法人 奈良県作業療法士会

INDEX

実 施 要 項 …… 2

学会長あいさつ …… 3

祝　辞 …… 4

日　程　表 …… 11

プログラム …… 12

特別講演、教育講演 …… 18

近畿作業療法士連絡協議会 連携７事業報告 …… 33

一 般 演 題 …… 44

第43回近畿作業療法学会 学会組織 …… 73

実 施 要 項

第43回 近畿作業療法学会

テ ー マ　作業療法のこれから
～臨床と研究の実践力を高める～

開催形式　Web 開催

会　　期　2023年6月4日（日）
特別講演、教育講演を LIVE 配信（Zoom ウェビナー）

2023年6月8日（木）～6月30日（金）
オンデマンド配信［質問受付期間：6月8日(木)～6月18日(日)］
一般演題、近畿作業療法士連絡協議会連携7事業報告、特別講演、
教育講演をオンデマンド配信

学 会 長　西井 正樹
一般社団法人 奈良県作業療法士会 会長

主　　催　近畿作業療法士連絡協議会

担　　当　一般社団法人 奈良県作業療法士会

運営事務局　学校法人 西大和学園 大和大学白鳳短期大学部
〒636-0011 奈良県王寺町葛下1-7-17
E-mail：43kinkiot@gmail.com

学会長あいさつ

第43回近畿作業療法学会の開催にあたって

第43回近畿作業療法学会
学会長　**西井 正樹**

この度、近畿作業療法士連絡協議会主催の第43回近畿作業療法学会を担当の奈良県作業療法士会が中心となって、オンラインにて開催させていただくことになりました。学会長を務めさせていただきます（一社）奈良県作業療法士会の西井正樹です。会期は2023年6月4日にWebによるLive配信、後日オンデマンド配信となりました。今回は4年ぶりに対面での学会を開催できることを願っていましたが、先の読めないコロナ禍の中で、Web開催となりました。しかしながら、Web開催とはいえ特別講演をはじめ10テーマの教育講演を配信することとなりました。内容は濃い学会になると思います。

また、今年は近畿作業療法士連絡協議会の50周年という区切りの年になります。今回の50周年を祈念いたしまして、登録は必要ですが、学会参加費は無料とさせていただきました。この近畿学会は、主催の近畿作業療法士連絡協議会で成り立っており、近畿の各士会の1人1人の年会費からの協力金で行っています。その協力金を最大限に活用し、今回の学会運営を行うことができました。学会参加資格は、ホームページをご確認ください。50周年記念式典もWebにて同時に行います。この記念すべき50周年の学会にぜひご参加ください。

今回の学会のテーマは「作業療法のこれから　～臨床と研究の実践力を高める～」と掲げ、教育講演では、10のテーマ別に臨床と研究の現場で活躍されている作業療法士に、作業療法の最新の現状や今、日本で必要とされている作業療法について大いに語っていただきます。

また、特別講演には大阪大学 精神医学分野教授の池田学先生に、認知症についてご教授をお願いしています。大変興味深い、学術的な講話が聴けるのではないでしょうか？

最後に、この学会が盛大に行われることを祈念いたしまして、学会長としての責務を果たしてまいります。

祝　辞

ご挨拶

近畿作業療法士連絡協議会
代表幹事　川 雅弘
（一般社団法人 和歌山県作業療法士会 会長）

近畿作業療法士連絡協議会の設立50周年にあたり、これまで協議会にご尽力いただいた諸先輩方、関係各位を代表してご挨拶をさせていただきます。

協議会の歴史を振り返ると、1970年に「関西地区」として始まり、翌年に「関西支部」、1981年からの「近畿作業療法士地区連絡会」を経て、1991年から現在まで「近畿作業療法士連絡協議会」として活動が引き継がれております。1985年に近畿の府県士会の設立が完了し、当時191名だった会員（大阪105、兵庫46、京都24、滋賀6、奈良5、和歌山5）も現在では約7,500名の大規模となり、二府四県が今後ますます連携しながら各士会員に寄与できる活動をしていかなくてはならないと感じている次第です。

さて、今年で43回を迎える近畿作業療法学会も、第1回（1981年）が京都府士会担当で開催され、第7回以降は奈良、大阪、兵庫、滋賀、京都、和歌山の輪番で絶やさず開催ができております。これもひとえに各士会員の皆様のご協力、ご尽力の賜物であり感謝申し上げます。私が所属する和歌山県士会では初開催となる第6回において、わずかな会員数での開催運営を断固拒否するも、当時の連絡会会長であった谷合先生をはじめ、近畿の先輩方が和歌山県まで来られて企画運営に協力していただき、無事に開催できたというエピソードも伺っています。『近畿は一つ！』という協議会が掲げる合言葉はこの頃から今も引き継がれているもので、この熱い関係は全国の他ブロックにはない結束力だと確信しております。協議会では年二回の役員会を開催していますが、そのうちの一回は近畿学会前日に行うのが慣例で、その夜の交流会では遅くまで議論を交わし、親睦を深めることができる貴重で楽しい時間も魅力的となっています。

また、日本作業療法士協会との連携機関である「都道府県作業療法士連絡協議会」が1994年に設立され、初代会長に大嶋先生（当時の京都府士会長）、2代目に大瀧先生（当時の兵庫県士会長）と、近畿の士会長が長期歴任され、全国の士会をけん引しながら、近畿各士会の活動をいつも後押しして下さったことが何よりも心強かったことを覚えております。

現在、本協議会では近畿作業療法学会の他に、時代のニーズに即した7つのテーマ（災害対策支援、バリアフリー展、MTDLP、認知症支援事業、次世代リーダー育成、自動車運転支援ネットワーク、精神科作業療法ワーキング）を連携事業と位置づけ、二府四県で担当者を設け、情報を共有しながら各士会、各地域での作業療法の啓発や資質向上に貢献できる活動を行っています。

関係各位におかれましては、今後とも協議会の活動にご理解とご協力をいただきながら、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

祝　辞

第43回近畿作業療法学会の開催ならびに近畿作業療法連絡協議会創立50周年を祝して

一般社団法人 日本作業療法士協会
会長　中村 春基

第43回近畿作業療法学会が、奈良県作業療法士会 西井正樹学会長の下、作業療法のこれから～臨床と研究の実践力を高める～をテーマに、WEB開催されることに、心より喜びを申し上げます。また、本学会の開催にご尽力いただきました役員、関係団体、会員の皆様に心より敬意を表します。加えて、近畿作業療法連絡協議会創設50周年おめでとうございます。50年という長きにわたり、本会を維持、運営されてきました、各士会長はじめ役員のご尽力に心から敬意を表します。併せまして、各士会員の皆様におかれましては、第8波のコロナ禍で日々、臨床に携わり各県民の健康と幸福にご尽力いただいていることに改めて感謝申し上げます。

学会は近畿2府4県士会の持ち回りで開催されると承知しておりますが、7回り目に入っているのですね。全国を見回しますと、九州、中四国、東海北陸、北関東甲信越、東北でそれぞれ開催されておりますが、九州に次いで2番目の歴史があると思います。私自身も第8回の学会長を仰せつかり、大阪の仲間と企画し、大阪市勤労会館で午後7時ごろまでシンポジウムを行い、学会終了後も近くの宿泊施設でナイトセッションを行ったと記憶しております。その仲間も還暦を迎えます。「光陰矢の如し」です。

学会テーマであります「作業療法のこれから」につきましては、協会は第四次5カ年戦略において、「地域共生社会の実現に向けた取り組みとそのための人材育成、組織力強化」を掲げ、2023年度から取り組んで参ります。是非、学会でもそれらを踏まえた議論がなされること、「臨床と研究の実践力を高める」については、連絡協議会という枠組みで、多施設間研究や臨床技術の研修体制などの構築について検討されることを願っております。

連絡協議会の役割は言うまでもありませんが、「士会間の交流を通して、近畿地区全体の作業療法（士）の質と地位の向上」にあります。MTDLPの取り組み、当学会等、士会の枠を超えての活動は、確実に情報の深さ、幅、気付きにおいて得難い機会を提供していると存じます。2府4県、それぞれ置かれている環境の違いはありますが、密な情報交換と懇親を深められ、近畿の作業療法全体が発展することを期待しております。

2035年には85歳以上の人口が前期高齢者を上回り、医療、介護の需要は総体的に減少していきます。一方、生産労働人口は減少し続ける中で、職場の倒産やＭ＆Ａは日常のことになります。これは、他の産業では現在でも当たり前の光景ですが、作業療法を取り巻く環境も激変すると思われます。その中で、個人、施設、地域、士会はいかにして生き残れるか？そんな、視点から作業療法を問い、近畿の作業療法（士）に光明を照らし続ける連絡協議会であってほしいと思っております。士会員の皆様のご健勝と、各士会の益々のご発展を願って祝辞と致します。

祝　辞

第43回近畿作業療法学会
近畿作業療法士連絡協議会設立50周年記念

一般社団法人 大阪府作業療法士会
会長　**関本 充史**

この度、第43回近畿作業療法学会が西井正樹学会長のもと、盛大に開催されますこと心からお慶び申し上げます。また、近畿作業療法士連絡協議会が50周年を迎えられること、重ねて御祝い申し上げます。そして、学会開催にあたり企画・運営に携わってくださった会員の皆様、関係者の方々に深く感謝の意を表します。

COVID-19感染が確認されてから4年が経過し、私たちの生活は一変し誰もが経験したことのない情勢下でありました。その中で、オンラインでの会議や研修会、ビジネスチャットツールの多様化など、コミュニケーションの手段も広がりました。今までとは違ったコミュニケーションの取り方で戸惑うこともありましたが、新たな手段として効率的に活用していることも事実です。そして、with コロナの時代を迎え始めた今、WEB の便宜性や対面の重要性を再認識する機会となり、これからのコミュニケーションの取り方やその価値を考えるきっかけになったかと思います。西井学会長が、今回の学会テーマを「作業療法のこれから～臨床と研究の実践力を高める～」とされたのも、急速に変わりゆく時代背景を受け、作業療法も時代に即した学問へ発展していくべきとの西井学会長の熱い想いが込められているのだと感じました。臨床での事象を研究し、その研究成果を臨床で活かす。この好循環はいつの時代でも必要であり、多様化するこの時代にはより一層強く求められています。会員の皆様にとってこの学会が、再確認する場となって頂くことを私自身も切に願います。このように、近畿圏域の作業療法士が集え、考える場があるのも、諸先輩方が近畿作業療法士連絡協議会を通じて繋いでくださったからです。この場を借りて心より感謝申し上げます。

人口減少・高齢社会が進む日本、地域包括ケアシステムの深化、物事に対する価値観の多様性など、これらに応えていける作業療法を考えていくには、世代を超えて近畿圏域の作業療法士が一致団結して取り組んでいく必要があります。この学会を機に、会員の皆様のお力添えを賜りますようお願いいたします。最後になりましたが、本学会のご成功と、士会会員の皆様のご健勝とご活躍、近畿作業療法士連絡協議会の今後ますますのご発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。

祝　辞

第43回近畿作業療法学会開催および
近畿作業療法士連絡協議会設立50周年によせて

一般社団法人 兵庫県作業療法士会
会長　長尾 徹

第43回近畿作業療法学会開催のお祝い申し上げます。西井学会長および奈良県作業療法士会におかれましては、開催にあたってのご苦労と、COVID-19の影響により運営方法に工夫（Web開催の計画）が必要であったことから、準備が大変であったろうと拝察いたします。ご尽力に際し、御礼申し上げます。

さて、今年度をもって近畿作業療法士連絡協議会も設立から50周年を迎えたことについても祝辞を捧げさせていただきます。逆算すると1973年に設立されたことになります。兵庫県作業療法士会の当時の会長は大喜多潤先生でした。大喜多先生の記録によると、設立当時は作業療法士協会の関西支部から近畿支部へ、そして近畿作業療法士連絡協議会へ発展したという沿革が示されています。近畿の各府県士会が単独の士会として活動できるまでは「近畿は1つ」という理念の元、共同で活動していました。この先人の功績が現在まで引き継がれ、2府4県での活動が協働して営まれています。それが、近畿作業療法学会であり、連携7事業です。近畿作業療法士連絡協議会を育んだ兵庫県作業療法士会の歴代の会長は、初代が先に述べた大喜多潤先生であり、第2代が大瀧俊夫先生、第3代目が長倉寿子先生でした。「近畿は1つ」としての活動は次世代にも引き継がれると期待しますし、実際に引き継がれるでしょう。学会開催や連携7事業だけではなく、2020年5月には、日本作業療法士協会に対して近畿作業療法士連絡協議会からの提案という取り組みも行われました。当時、計画されていた臨床実習指導者講習会がCOVID-19の影響で次々と中止になり、指定規則改訂による臨床実習が開始されるまでに協会が目標としていた修了者数に至らないと予測され、この不安の払拭に日本作業療法士協会に対応していただくというエピソードもありました。

近畿地区内の養成校を卒業した会員にとっては、近畿作業療法学会への参加や、連携7事業への参加などにより、同窓生とりわけ同級生との再会の場にもなっています。懐かしさを感じる機会となるだけではなく、初心を顧みる場として重要な機会となっていることでしょう。今後も近畿における協働した活動や情報交換が円滑に、さらに充実して取り組まれることを望んでやみません。

祝　辞

一般社団法人 滋賀県作業療法士会
会長　**木岡 和実**

近畿作業療法士連絡協議会が設立50周年という記念すべき年を迎えられましたことに、心よりお祝い申し上げます。

併せて、1991年に設立されて以来、府民・県民の健康と幸福、保健・医療・福祉の発展を目指し、作業療法士の学術技能の研鑽や作業療法士の普及にむけた多くの事業運営にご尽力された歴代会長をはじめ役員の方々並びに関係各位に対しまして、深く敬意を表するとともに心から感謝申し上げます。

この節目となる年に近畿作業療法士連絡協議会の事業である第43回となる近畿作業療法学会が奈良県作業療法士会の西井正樹学会長のもと、盛大に開催されますこと心よりお祝い申し上げます。連絡協議会の学術研鑽事業である今回の学会でも、それぞれの立場から、作業療法士として人々の健康と幸福にむけて専心されてこられた多くの研究活動発表があり、参加されている皆様にとって作業療法の知識と技術に関する情報交換や議論の場となり、有意義な自己研鑽の機会となることと思います。このような作業療法士一人一人のたゆみない日々の研鑽による技能の向上と実践に裏付けられた活動が作業療法の発展の原動力・推進力となって、今日の保健・医療・福祉における作業療法の礎が築かれてきたと言えます。

現在の我が国は、皆様もご承知のとおり世界に類をみないほどの急激な速度で超高齢化が進み、地域で暮らしを支える地域完結型医療への転換と地域における多様な高齢者の暮らしの継続を図るための多様なサービス提供体制の構築が大きな課題となっています。また地域には高齢者に関係する介護予防や認知症へ対応が求められているばかりではなく、障がい者等の社会的孤立、就労、発達障害支援など様々な地域課題が山積している状況です。地域で暮らす人々を取り巻く社会環境は時代と共に大きく変化しています。誰もが自分らしく暮らし続けられる地域共生社会の実現や地域包括ケアシステム構築にむけて、作業療法士の担う役割は重要であると言えます。これまで一人一人の作業療法士の実践と活動により、作業療法が発展し社会に貢献してきたように、これからの社会環境とその地域のニーズの変化に対応すべく地域に作業療法士の役割を根付かせ現場の実践者として活躍できるように、これまでにも増して充実した連絡協議会の技能の向上と普及にむけた事業が進められることを心から期待いたしております。

最後に、近畿作業療法連絡協議会のますますご発展と士会役員の皆様方はじめ、会員皆様方のご健勝とご活躍を心から祈念いたしまして、50周年のお祝いの言葉とさせて頂きます。

祝　辞

近畿作業療法士連絡協議会設立50周年
記念式典に寄せて

一般社団法人 京都府作業療法士会
会長　**渡邉 聡**

50周年記念おめでとうございます。

近畿の作業療法士会を支える、近畿作業療法士連絡協議会が50周年を迎えられるにあたり、京都府作業療法士会としまして心より敬意を表します。

私ども京都府作業療法士会は昭和59年（1984年）の11月に設立されましたので、ようやく38年経過といったところです。

50年前は全国の作業療法士数を合わせても100人に満たない中で、近畿圏で有志の作業療法士が集まって情報交換やミニ研修会などを行っていたことが近畿作業療法士連絡協議会発足のきっかけとお聞きしております。

それが現在は近畿圏だけで5,000名を超える作業療法士が活躍する状況となり、その節目に立ち合える喜びを感じております。

協議会の中には多くの連携事業があり、バリアフリー展・MTDLP・認知症支援・災害支援・自動車運転支援・次世代リーダー育成・精神科OTワーキング…などの協働事業に取り組まれています中、それら全ての事業が営み続けられているのも50年もの歴史を重ねてくることができた会であるが故と言えます。

この他にも作業療法の知識、技術の活用は広範囲に渡ってきており、特別支援教育への参画、地域支援事業や健診事業、一般産業界での研究等々からも要請を受けている現状があります。作業療法士を取り巻く状況の変化や要請の声を漏らさぬよう、常にアンテナを張り続けていくこともまた、近畿の士会の結束力を以て成し得ていけるものであります。

作業療法士の半数以上は報酬制度の枠組みの中で日々の糧を得ている中、報酬制度の枠組みの中であってもなくても、今後も近畿の作業療法士の結束力を必要とする声に応え続けていく会として近畿作業療法士連絡協議会が発展し続けることを祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

祝　辞

近畿作業療法士連絡協議会50周年に寄せて

一般社団法人 奈良県作業療法士会
会長　**西井 正樹**

このたび近畿作業療法士連絡協議会が創立50周年を迎えられましたこと心よりお祝い申し上げます。この50周年の記念すべき年に近畿作業療法学会の学会長ができること、大変喜ばしいとともに、身の引き締まる思いです。

この協議会が半世紀にわたり、近畿の作業療法士の集いの場として、医療・福祉の発展にご尽力され、リハビリテーションの臨床・教育・研究・地域貢献の担い手として、長年にわたり重要な役割を担ってこられました。

また、今回第43回を迎える近畿作業療法学会を主催し、作業療法士の研究発表の場を提供し、近年では、近畿の6士会が力を合わせて取り組んでいる連携事業でも様々な成果を上げてきました。これもひとえに、歴代の士会長をはじめ役員・理事の皆様並びに会員の皆様方のご尽力の賜であり、深く敬意を表するとともに改めて感謝申し上げる次第です。

さて、近年の新型コロナウイルスによる社会構造の変化、少子高齢社会、大規模災害等、病院や施設での作業療法だけでなく、多岐にわたる色々な課題が求められるようになってきました。各士会で取り組むべき課題が、より一層複雑構造化していき、広域での協力が必要となってきました。この協議会は、課題を解決すべく「近畿はひとつ」のスローガンのもとに連携協力をすすめ、2倍・3倍の力を発揮できる団体だと考えています。

この協議会におかれましては、創立50周年を契機に、作業療法がより魅力のある職業になりますよう、近畿作業療法学会や連携事業を通じて、一層研鑽・啓発に努め、さらなる飛躍を遂げることをご期待申し上げます。

最後に、近畿作業療法士連絡協議会のさらなる発展と、会員の皆様の今後ますますのご健勝、ご活躍を心から祈念申し上げまして、お祝いの言葉といたします。

日　程　表

LIVE：2023年**6月4日**㈰　オンデマンド：2023年6月8日㈭～6月30日㈮

第１会場（LIVE 配信）

9:50～　**開　会　式**

10:00～10:30
近畿連絡協議会 50 周年挨拶

10:30～11:20　**教育講演 1**
目標設定におけるエビデンスと実践：ADOC の紹介
講師：友利 幸之介（東京工科大学）
司会：塩田 大地（西大和リハビリテーション病院）

11:30～12:20　**教育講演 2**
半側空間無視と関連症状に対する理解を深める
講師：大松　聡子（作業療法士）
司会：北別府 慎介（西大和リハビリテーション病院）

昼　休　憩

13:30～14:20　**教育講演 3**
対象者の useful hand を支える手外科領域のこれから
講師：蓬莱谷 耕士（関西医科大学）
司会：毛利　陽介（大和大学白鳳短期大学部）

14:30～15:20　**教育講演 4**
作業療法士が描く未来志向の就労支援
講師：金川 善衛（就労移行支援事業所ワンモア）
司会：木納 潤一（秋津鴻池病院）

15:30～16:30　**特別講演**
老年精神医療における作業療法への期待
講師：池田　学（大阪大学大学院）
司会：西井 正樹（奈良県作業療法士会）

16:30～　**閉　会　式**

第２会場（LIVE 配信）

10:30～11:20　**教育講演 5**
認知症の人に対する生活支援の方略―これまでとこれから―
講師：永田 優馬（大阪大学大学院）
司会：坪内 善仁（奈良学園大学）

11:30～12:20　**教育講演 6**
高齢者の心理的適応を促進する作業療法
講師：木下 亮平（大阪人間科学大学）
司会：片岡　歩（かつらぎクリニック）

13:30～14:20　**教育講演 7**
作業活動の治療的有用性
～脳波と自律神経活動を用いた検討～
講師：白岩 圭悟（大阪河崎リハビリテーション大学）
司会：鼓　美紀（大和大学白鳳短期大学部）

14:30～15:20　**教育講演 8**
読字障害の理解と支援
～小脳障害仮説に焦点を当てて～
講師：高畑 脩平（藍野大学）
司会：福永 寿紀（大和大学白鳳短期大学部）

オンデマンド配信

一 般 演 題

近畿作業療法士連絡協議会連携７事業報告

特別講演、教育講演

6月8日㈭～6月30日㈮
オンデマンド配信

（質問受付期間：
6月8日㈭
～6月18日㈰）

プログラム

開 会 式　9：50～　　LIVE 配信：第1会場

近畿連絡協議会50周年挨拶　10：00～10：30　　LIVE 配信：第1会場

特別講演　15：30～16：30　　LIVE 配信：第1会場

司会：西井 正樹（奈良県作業療法士会）

老年精神医療における作業療法への期待

池田 学　大阪大学大学院 医学系研究科 精神医学教室

教育講演1　10：30～11：20　　LIVE 配信：第1会場

司会：塩田 大地（西大和リハビリテーション病院）

目標設定におけるエビデンスと実践：ADOC の紹介

友利 幸之介　東京工科大学 医療保健学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

教育講演2　11：30～12：20　　LIVE 配信：第1会場

司会：北別府 慎介（西大和リハビリテーション病院）

半側空間無視と関連症状に対する理解を深める

大松 聡子　作業療法士

教育講演3　13：30～14：20　　LIVE 配信：第1会場

司会：毛利 陽介（大和大学白鳳短期大学部）

対象者の useful hand を支える手外科領域のこれから

蓬莱谷 耕士　関西医科大学 リハビリテーション学部 作業療法学科

教育講演4　14：30～15：20　　LIVE 配信：第1会場

司会：木納 潤一（秋津鴻池病院）

作業療法士が描く未来志向の就労支援

金川 善衛　NPO 法人日本学び協会 就労移行支援事業所ワンモア

教育講演5　10：30～11：20　　LIVE 配信：第2会場

司会：坪内 善仁（奈良学園大学）

認知症の人に対する生活支援の方略
―これまでとこれから―

永田 優馬　大阪大学大学院 医学系研究科 精神医学教室

教育講演6　11：30～12：20　　LIVE 配信：第2会場

司会：片岡 歩（かつらぎクリニック）

高齢者の心理的適応を促進する作業療法

木下 亮平　学校法人薫英学園 大阪人間科学大学 保健医療学部 作業療法学科

教育講演7　13：30～14：20　　LIVE 配信：第2会場

司会：鼓 美紀（大和大学白鳳短期大学部）

作業活動の治療的有用性
～脳波と自律神経活動を用いた検討～

白岩 圭悟　大阪河崎リハビリテーション大学 作業療法学専攻

教育講演8　14：30～15：20　　LIVE 配信：第2会場

司会：福永 寿紀（大和大学白鳳短期大学部）

読字障害の理解と支援
～小脳障害仮説に焦点を当てて～

高畑 脩平　藍野大学 医療保健学部 作業療法学科

閉 会 式　16：30～　　LIVE 配信：第1会場

近畿作業療法士連絡協議会 連携７事業報告
プログラム

オンデマンド配信：2023年6月8日㈭～6月30日㈮

災害支援対策事業

災害支援対策事業報告

林 辰博　　大阪府作業療法士会

バリアフリー展2022事業報告

バリアフリー展における作業療法の啓発活動

岡 敏文　　和歌山県作業療法士会

MTDLP

MTDLP 報告

北別府 慎介　奈良県作業療法士会

認知症支援事業

認知症支援チームの活動と各府県士会の動き

森 志勇士　　京都府作業療法士会

近畿 OT 自動車運転支援ネットワーク事業

2022活動報告

鍵野 将平　　和歌山県作業療法士会

次世代リーダー育成

組織率向上に向けた県士会の魅力を発信する

野口 勇樹　　滋賀県作業療法士会

精神科作業療法ワーキング

（K-POTW：Kinki-Psychiatric Occupational Therapy Working）
令和４年度活動報告 令和５年度事業計画

平山 聡　　京都市こころの健康増進センター

一般演題プログラム

オンデマンド配信：2023年6月8日㈭～6月30日㈮

第1セッション

［ 身体障害（脳血管，自動車運転）］　座長：岩本 健吾（奈良県総合リハビリテーションセンター）

1-1　認知 FIM26点の麻痺改善を認めていない急性期重度脳卒中症例の
運動 FIM 改善方法の一考察

吉村 正仙　医療法人清仁会 シミズ病院

1-2　両側橋梗塞を呈した Eight-and-a-half 症候群に対する急性期作業療法

安田 早希　独立行政法人 京都市立病院機構 京都市立病院

1-3　麻痺側上肢の日常への参加を目的とした他職種連携における急性期作業療法士の役割

石東 友夏　地方独立行政法人 りんくう総合医療センター

1-4　ADOC-H を用いた課題設定により，IADL の獲得に繋がった右視床出血の一症例

平山 公章　医療法人寿山会 喜馬病院

1-5　当院における脳損傷者の自動車運転再開支援
―院内評価とアンケート調査を終えた1症例から見える今後の課題―

松本 佳純　地方独立行政法人 奈良県立病院機構 奈良県総合リハビリテーションセンター

第2セッション

［ 身体障害（脳血管，がん）］　座長：片岡 歩（かつらぎクリニック）

2-1　終末期における，事例にとっての習字という作業の意味

兵頭 智子　医療法人鴻池会 秋津鴻池病院

2-2　母親としての役割の再経験により離床及び生活意欲の向上に至った一事例

衛藤 静也　医療法人社団薫楓会 緑駿病院

2-3　生活歴を参考にした介入による環境面の変化と，チームアプローチの質向上について

山崎 龍之介　医療法人社団行陵会 京都大原記念病院

2-4　重度感覚障害と運動失調に対し，
健側の感覚を利用したフィードバックが有効であった一事例

佐藤 晃　奈良県立医科大学付属病院 医療技術センター リハビリテーション係

2-5　「大学に行きたい」生活を再構築し，今後の社会参加へ繋げる一助となった，
四肢短縮型低身長症を有する両下肢不全麻痺の一例

市山 亮　兵庫県社会福祉事業団 兵庫県立リハビリテーション中央病院

2-6 回復期脳卒中患者における上肢活動量の分布特性とその回復過程の違い
―3軸加速度計を用いて―

南川 勇二　医療法人友紘会 西大和リハビリテーション病院
畿央大学大学院 健康科学研究科 神経リハビリテーション学研究室

第3セッション

［ 身体障害（運動器，高齢期，地域）］　座長：中田 慎吾（ユーティー訪問看護ステーション）

3-1 COPM と OTIPM を利用し，認知症の妻と一緒に再び布団で寝ることを通して，
夫としての役割と生きる意義を見出した FHR 術後の CL への作業療法の一例

南部 計　六地蔵総合病院

3-2 右肩関節屈曲動作困難により洗髪動作の安定性低下を認めた右肩甲骨骨折の一症例

松尾 紳也　一般財団法人 神戸マリナーズ厚生会 神戸マリナーズ厚生会病院

3-3 慢性期脳卒中患者に対し拡散型圧力波治療器と外来作業療法を併用することで
ADL 介助量の軽減を認めた一症例
～ ADOC を用いた介護負担軽減への介入～

山本 紘平　医療法人幸生会 琵琶湖中央リハビリテーション病院

3-4 脳卒中後に片麻痺を呈した訪問リハビリテーション利用者に対し，
行動変容を促進した介入により趣味のゴルフが一部再開できた事例

今東 裕二　西宮回生病院

3-5 頻回な訴えのある認知症患者に対し多職種協働で介入したことにより
BPSD を軽減させ退院につながった一例

吉田 寿里　医療法人鴻池会 秋津鴻池病院

3-6 短時間通所リハビリでの自動車運転支援の経験
～運転困難事例に対し，代替手段の提案から，自動車運転以外に価値を見出した事例～

西山 亜由美　医療法人恒仁会 近江温泉病院

第4セッション

［ 精神・発達障害 ］　座長：木納 潤一（秋津鴻池病院）
福永 寿紀（大和大学白鳳短期大学部）

4-1 長期入院を送る統合失調症対象者の地域移行に向けた作業療法
―その人らしい地域生活に寄与する退院準備グループの実践―

南 庄一郎　大阪府立病院機構 大阪精神医療センター リハビリテーション室

4-2 園コンサルテーションにより母子ともにより良い作業的存在になれた事例

荻原 エリ　フリーランス
太子町子育て支援課

4-3 生活破綻・生命危機に直面した兄弟に対する精神科訪問看護における
作業療法士の役割に関する一考察
～「息子を頼みます」亡き母の思いを実現させるために～

香山 恭範　株式会社さんぽ道 訪問看護リハビリステーション

4-4 保育所等訪問支援の主訴の分析から考察する作業療法士の専門性

福西 知史　株式会社 UT ケアシステム リハビリ発達支援ルーム UT キッズ

4-5 幼稚園での保育所等訪問支援における発達支援の在り方について

菅 寿恵　株式会社かすたねっと 子ども発達スクールかすたねっと

4-6 経験のある編物を再び取り組めるよう環境設定を模索し関わった認知症患者の一事例

堤 茉子　医療法人鴻池会 秋津鴻池病院

第5セッション

［ 管理・教育・基礎 ］　座長：渡邉 俊行（関西学研医療福祉学院）

5-1 セラピストと介護士による下着形態の定期的な検討が
当院回復期病棟入院患者の下着形態改善に与えた影響の考察

田山 大介　医療法人社団 西宮回生病院

5-2 地域在住成人の実行機能における主観的評価と客観的評価との関係
―実行機能質問紙の利用可能性の検討―

岩崎 智子　奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科
大阪公立大学大学院 リハビリテーション学研究科

5-3 新人教育講義の役割
―参加者アンケートの分析結果をもとに―

常深 志子　地方独立行政法人 市立吹田市民病院

5-4 退院後の生活につながる「気づき」を促す学習会の実践
～ブロック活動で新人の振り返りをサポートする意義～

櫛邉 康孝　医療法人 協和会 協和会病院

5-5 地域での生活支援に必要な作業療法学生の
卒業時コンピテンシー項目の作成に関する研究
―デルファイ法を用いて―

赤堀 将孝　関西福祉大学大学院 看護学研究科 博士後期課程

特別講演

教育講演

老年精神医療における作業療法への期待

池田 学　大阪大学大学院 医学系研究科 精神医学教室

略　歴

1984年
東京大学 理学部 卒業

1988年
大阪大学 医学部 卒業

1994年
兵庫県立高齢者脳機能研究センター
研究員 兼 医長

1996年
愛媛大学 医学部 精神科神経科
助手

2000年～
ケンブリッジ大学 神経科へ留学

2007年～
熊本大学大学院 生命科学研究部
神経精神医学分野 教授

2016年5月～
大阪大学大学院 医学系研究科 精神医学教室

主要研究領域

老年精神医学，神経心理学 など

所属学会等

- 日本老年精神医学会 理事長
- 日本神経心理学会 理事長
- 日本精神神経学会 副理事長
- International Psychogeriatric Association（国際老年精神医学会）理事長
- Asian Society Against Dementia（アジア認知症学会）理事
- 日本認知症学会 理事

など

主要著書

- 池田 学．中公新書　認知症．中央公論新社，東京，2010
- 池田 学（編著）．日常診療に必要な認知症症候学．新興医学出版社，東京，2014
- 田川 皓一，池田 学（編著）．神経心理学への誘い　高次脳機能障害の評価．西村書店，東京，2020

など

高齢者，とりわけ認知症を抱える高齢者にやさしい地域社会（Dementia Friendly Community）づくりは，わが国の認知症政策の根幹をなす認知症施策推進戦略（新オレンジプラン）の副題にも掲げられているが，このように強調されなければならないほど，現代社会は高齢者，特に認知症を抱える高齢者には生きづらい社会になっているということの裏返しと考えるべきであろう．特に，65歳以上を含む全世帯の60%を超えた独居高齢者ならびに高齢者夫婦だけの世帯の急速な増加に伴い，地域における一人暮らしの初期認知症／軽度認知障害（MCI）段階の高齢者，老年期のサイコーシスや未診断の成人発達障害の高齢者，老老介護に従事する高齢者など虚弱高齢者に対する生活支援が喫緊の課題になりつつある．

演者が作業療法と出会ったのは，精神科医になって1年目の外勤先の精神科病院であった．当時は長期入院の統合失調症の患者さんたちが中心だったように思われるが，老人病棟（当時はまだ認知症病棟は存在しなかった）に大学病院の外来から入院させてもらった主にPick病（前頭側頭型認知症）の作業療法に取り組んだ．脱抑制や常同行動など様々な行動障害により在宅でのケアが困難になった前頭側頭型認知症は，施設での介護（そもそも介護保険もまだなくサービスそのものが極めて乏しかった時代）も困難で，精神科病院での抗精神病薬による過沈静的な治療に頼らざるを得ないのが現状だった．そこで，治療介入の充実を図るために，病棟担当の作業療法士や臨床心理士と協働しながら，疾患特性的に比較的保たれやすいエピソード記憶を活かして治療導入時は治療者を固定すること，常同行動のパターンから患者の生活環境に不適応的行動を除く代わりに適応的な行動を入れ込んでいくことなどを進めていき，後にルーチン化療法と呼ばれるようになった前頭側頭型認知症の非薬物療法を開発した．このように正確な診断と疾患特徴に基づく作業療法は，多職種チームによるアプローチの醍醐味である．

熊本大学では，多職種アウトリーチチームによる退院前訪問に取り組んだ．検査入院した独居のMCI患者を中心に，入院中に患者や離れて暮らす家族，ケアマネージャーなど地域の支援者とともに患者宅を訪問し，たとえばレビー小体型認知症患者であれば，（アルツハイマー病に比べて5-10倍転倒しやすいことが知られているので）浴室

など転倒リスクの高いエリアで手すりの設置や段差の解消を徹底したり，中核症状である幻視を誘発しないように部屋の明るさを調節したりするなどの環境調整を進めていた．このような多職種の観点を取り入れた支援を実施してから退院してもらうと，患者は長期間安全に独居生活を過ごせることを明らかにした．ここでも多職種チームのリーダーは作業療法士である．

現在大阪大学においては，地域のネットワークが機能しにくい都市部で，上述したように急増する独居の初期認知症／MCI 患者に対する見守り研究を開始している．すなわち，多職種のアウトリーチによる生活支援と，虚弱高齢者の日常生活にウェアラブルセンサーやカメラなどのデバイス／センサ，ヒト型会話ロボットを導入して，自宅での観察と働きかけから身体的不活発や認知的不活発，睡眠障害を検出し，予防的介入を可能とするヘルスケアサービスモデルの実現を目指している．さらに，コロナ蔓延化で多職種による退院前訪問が困難になる中で，予め作業療法士が作成したマニュアルに沿って患者家族が患者宅のポイントになる場所を写真撮影し，そのデータを基に多職種で環境調整の提案をする手法（カメラを用いた非訪問型の居住環境および生活機能評価ツール）も開発している．

このように，老年精神医療における生活支援のリーダーとして期待される作業療法士の可能性は，ますます高まっている．当日は，今後活躍が期待される新たな領域も含めて，概説してみたい．

【参考文献】

・池田 学．中公新書　認知症．中央公論新社，東京，2010

・池田 学（監修），村井千賀（編集）．認知障害作業療法ケースブック．メジカルレビュー社，東京，2014

・Nagata Y, Hotta M, Satake Y, Ishimaru D, Suzuki M, Ikeda M. Usefulness of an online system to support daily life activities of outpatients with young-onset dementia: a case report. Psychogeriatrics. 2022 Nov; 22(6): 890-894.

・Ishimaru D, Kanemoto H, Hotta M, Nagata Y, Satake Y, Taomoto D, Ikeda M. Case Report: Treatment of delusions of theft based on the assessment of photos of patients' homes. Front Psychiatry. 2022 Mar 17; 13: 825710.

一 般 演 題

1-1　認知 FIM26 点の麻痺改善を認めていない急性期重度脳卒中症例の運動 FIM 改善方法の一考察

○吉村 正仙（OT）
医療法人清仁会 シミズ病院

Key word：認知 FIM，ADL 指導，病棟 NS との連携

【はじめに】今回，56㎖程度の被殻出血で，重度左片麻痺患者で急性期入院期間内に麻痺の改善得られなかった症例を担当した．症例の特性として認知機能が発症直後より保たれていた．

認知 FIM が保たれている脳卒中患者の報告として宮崎らは『2週時で認知 FIM が自立・修正自立以上の群において退院時には運動 FIM が有意に改善した』と報告がある．

脳卒中ガイドラインでは，急性期リハビリテーションにおいて，セルフケア訓練など発症後できるだけ早期から行うことや日常生活動作を向上させるための訓練を行うことが勧められている．

本症例では，急性期でのセルフケア訓練と身体的なリハビリテーションを両立するために必要な時間確保をするプログラムを作成し，効果が得られたので報告する．

【基本情報】A 氏，40代女性右利き．

診断名：右被殻出血

1. **生活歴**　夫・息子3人暮らし．看護師．
2. **現病歴**　勤務中に体調不良を訴え仕事先で休憩，様子を案じた同僚が倒れているところを発見，救急搬送される．

【ニーズ】排泄動作自立．

【作業療法初回評価】GCSE2V1M6合計8点声掛けに頷き健側上肢でジェスチャー表出．

Brs 左上下肢Ⅰ

FIM：運動13点　認知26点

【介入方針】認知 FIM の各項目が修正自立～見守りの症例は，一度の指導で動作内の手順や注意点を学習が行え，重度麻痺であっても動作を繰り返すことで運動学習が行えると判断した．

ニーズである排泄訓練に着目し，訓練を効率よく進めるために看護師とセラピストで訓練を行う方針となった．

【方法と経過】急性期病棟：発症～21病日

〈4病日目〉端坐位実施．

上肢訓練を毎介入時実施．

BP150/88　HR95　Spo299%/Room

〈10病日目〉長下肢装具使用しての移乗・立位，歩行訓練を転院日まで毎介入時実施．

BP115/76　HR78　Spo2100%/Room

〈12病日目〉排泄動作2人全介助にて開始．下衣操作時は1人が立位保持介助，もう1人が下衣操作．

症例・病棟 NS に排泄動作指導内容の共有．OT 場面での排泄訓練介入は1度のみ実施．共有内容は3点あり，1点目は病棟 NS に OT 介入方針の説明．2点目は当症例に関わる全ての病棟 NS と動作手順を実演して共有．3点目は病棟排泄誘導手順を共有した病棟 NS が中心に実施．その後病棟 NS と症例のみで排泄訓練を行う．

〈21病日目〉回復期リハビリテーション病院転院．

【結果】Brs 左上下肢Ⅰ

FIM：運動21点　認知26点

排泄動作：移乗見守り，物的支持あれば立位保持見守り，下衣操作全介助．

【考察】本症例は OT の一度の排泄指導で運動 FIM と介助量の改善を見ることが出来た．OT 評価として一度の指導で動作内の手順や注意点の学習が行えたこと，認知 FIM 項目が介入時より修正自立～見守りであったことを加味して，ADL の再獲得のために反復による運動学習機会を増やす必要があった．OT 訓練内での排泄指導は最小限でよいと判断，病棟 NS と協働し介入方針・方法を共有した上で排泄訓練を行うことができた．前述の介入方法により症例に必要な運動学習機会を得られたものと考えている．その事で OT は排泄訓練を行う時間を上・下肢，移乗や動的立位訓練に当てることができ，結果としてリハビリ時間の確保ができ十分な治療の提供と，麻痺の改善が得られなくとも運動 FIM 改善に繋がったと考える．実際に症例の介助量軽減が行え，介護者も2人から1人介助となり病棟への負担軽減も行えた．

また，患者自身が看護師という職業で自身の状況を把握する知識や40代という身体的な能力の高さがあったということも要因の中に加味するべきであると考える．

【説明と同意】本研究は，ヘルシンキ宣言に基づき実施した．対象者には，研究内容について口頭および書面にて説明を行い，同意書へ自筆による署名をもって研究協力の同意を得た．

〈次期開催予定〉

第44回近畿作業療法学会

開催日：2024年6月29日（土）～30日（日）＜予定＞

会　場：グランキューブ大阪（大阪府立国際会議場）
＜予定＞

学会長：松下　太（森ノ宮医療大学）

事務局：一般社団法人　大阪府作業療法士会　事務局

主　催：近畿作業療法士連絡協議会

担　当：一般社団法人　大阪府作業療法士会

第43回 近畿作業療法学会

発　行　者：近畿作業療法士連絡協議会

運営事務局：学校法人　西大和学園　大和大学白鳳短期大学部
〒636-0011　奈良県王寺町葛下1-7-17
E-mail：43kinkiot@gmail.com

出　　版：株式会社セカンド
〒862-0950　熊本市中央区水前寺4-39-11　ヤマウチビル1F
TEL：096-382-7793　FAX：096-386-2025
https://secand.jp/

第43回 近畿作業療法学会　運営事務局

学校法人 西大和学園　大和大学白鳳短期大学部

〒636-0011 奈良県王寺町葛下1-7-17

E-mail：43kinkiot@gmail.com